

# 徳、状況主義、エンハンスメント

飯塚理恵

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

2000年頃から、社会心理学的知見に基づいて徳倫理を批判する状況主義と呼ばれる一群の哲学者達が現れた。特に、代表的な状況主義者である Doris は様々な心理学的データが、我々の行為は道徳的に関係のない状況主義的な諸要素に影響を受けることを示しており、それゆえ、有徳な行為が一貫した安定的性格特性から生じると考える徳倫理理論は経験的に妥当でないと結論づけた(Doris 2002)。一方で認識論では、知的徳という規範的な概念を導入し新旧さまざまな認識論的問題を解決しようとする徳認識論と呼ばれる立場が登場した。近年 Alfano が、明示的に徳認識論も状況主義の批判に晒されると主張している。このように、徳の理論は広く状況主義者の批判の対象となっている(Alfano 2013)。

他の規範倫理理論ではなく、徳の理論のみが状況主義の批判を受ける理由として、徳が道徳的に厚い概念 (morally thick concept) であるという点が挙げられている(Alfano 2012)。道徳的に厚い概念が (薄い概念と比較して) 何であるかということ自体にも多くの議論があるが、一般には、厚い概念は、記述的な内容を持つ規範的な概念であるという意味で理解される(Battaly 2008)。例えば、勇気の徳は、徳を持つ人のある種の行為のあり方を記述する一方で (リスクを負う、危険に打ち勝つ、等)、それが賞賛に値するという規範的な含意も含んでいる。状況主義者が批判する対象は、何らかの性質を指す徳の記述的要素の方であり、それらが経験的に不適切であると批判していると理解することができる。

しかしながら徳理論家はそこで、徳の記述的側面はあくまでも有徳な者の持つ諸性質について記述しているのであり、そのような記述は我々の多くが持つ行動のあり方と一致する必要はないと応答することができるだろう。つまり、徳理論は典型的な行為者の行為を予測・説明することはできないが、我々が目指すべき有徳な行為者の持つ諸性質を説明・予測することは可能である。しかしこのような主張に対しても Doris は、理想に訴えることは徳理論の利点を損なうことになるとして批判する。人が有徳になるために徳の理論に言及する必要があると、徳倫理のみが持つと思われていた非理論媒介性という利点が失われてしまうというのである。

しかし、徳理論家が徳の獲得に要請するものは体系的な徳の理論への言及ではない。例えば、Hursthouse は、様々な系列 X のうちの少なくとも一つに基づいて有徳な行為を選択するということが道徳的動機を持つということの意味であるとした。ここで系列とは個別徳 V を持つ人が、それに従って V 行為をするような理由を指す (Hursthouse 1999)。気前の善さ (generous) の徳を持つ人は「彼はそれが必要だったのだ」、「彼はそれを私に求めた」といった理由を持つ。これら諸

理由は必ずしも理論負荷的な概念（徳や正しさ等）を含まないことがわかる。徳倫理は有徳な動機が理論負荷的であることを求めないが、自然な性向や偶然ではなく、ある特定の理由のタイプに基づいて行為が選択されることが必要なのである。

もちろん、このように特定の理由タイプに基づいて（道徳的に適切に動機付けられて）行為することが不可能であれば、徳理論にとって強敵となるだろう。しかし、近年の心理学的研究はむしろ、我々の動機のあり方が行為に与える影響を強調している。Deci 達は、ある活動に内発的に動機付けられているグループと、（報酬等によって）外発的に動機付けられているグループを比較し、前者のグループがより当該の活動に従事することを示した(Ryan and Deci 2000)。その際彼らが、望ましい行為を行う主体の動機のあり方に注目している点は示唆的である。このように、徳倫理の記述要素の経験的妥当性は、動機に関する心理学的研究によって支持されるように思われるのである。

近年、様々な技術（神経科学的、薬理的介入）を用いて、道徳能力、認知能力のエンハンスメントを行い、より善い人間になることや幸福になることを提唱する者がいる。この試みは、徳エンジニアリングと称される(Jotterand 2011)。人間の本性的制約により、我々が完全に有徳になることは困難ではあるが、道徳的動機に基づいた行動傾向性としての徳を涵養していくことは可能であるという答えによって徳理論家の状況主義への回答が締めくくられるのならば、その涵養を促進するような様々な技術が存在した場合、我々はそれらを積極的に用いるべきではないかという問いが生じるだろう。もし徳理論的な観点から様々なエンハンスメント技術を、受け入れ可能なものとそうでないものに分類することができるならば、その差異の基準は何によって正当化されるだろうか。徳理論家にとってこの問題こそ中心的に取り組むべき課題であると思われる。

本発表ではこのように、状況主義の批判から徳の理論を擁護し、二者の対立は今後徳とエンハンスメントの議論に取って代わられるべきであることを示していく。

参考文献

- Alfano, M. (2012), 'Expanding the situationist challenge to responsibilist virtue epistemology', *The Philosophical Quarterly*, 62/247, 223-49.
- (2013), *Character as Moral Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Battaly, H. (2008), 'Metaethics Meets Virtue Epistemology: Salvaging Disagreement about the Epistemically Thick', *Philosophical Papers*, 37/3, 435-54.
- Doris, J. (2002), *Lack of Character: Personality and Moral Behavior*. Cambridge University Press.
- Hursthouse, R. (1999), *On virtue ethics*. Oxford University Press.
- Jotterand, F. (2011), "'Virtue engineering" and moral agency: Will post-humans still need the virtues?', *AJOB Neuroscience*, 2/4, 3-9.
- Ryan, R.M. and Deci, E.L. (2000), 'Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions and New Directions', *Contemporary Educational Psychology*, 25/1, 54-67